

気違いジュルジョーン

(モリエールの主題による三幕の喜劇)

ミハイール・ブルガーコフ 作

能 美 武 功 訳

登場人物

ルイ・ベジャール 男優(舞台ではジュルジョーン)

ユベール 男優(舞台ではジュルジョーン夫人)

モリエール夫人 女優(舞台ではリュスイーリ)

ラグランジュ 男優(舞台ではクレオント)

チエーブリー夫人 女優(舞台ではドリメーナ)

ラトリリエール 男優(舞台ではドラント侯爵)

ボーバリ夫人 女優(舞台ではニコリー)

カヴィエーリ 男優(舞台ではクレオントの下男)

チエーヴリ 男優(舞台ではフェンシングの教師)

チュ・クルワズイ 男優(舞台では哲学者パンクラス)

芝居と音楽の教師

ダンスの教師

ブレンダウワーン 男優(舞台ではジュルジョーンの下男)

仕立屋

公証人

ドン・ジュアーン

騎士団長の彫像

男の踊り手達

女の踊り手達

音楽奏者達

コック達

(場は、一六七〇年、パリ。)

第一幕

ベジャール(幕の隙間(すきま)から登場。レインコートに帽子。カンテラを持っている。少しびっこ。)
(お天道(てんとう)様、有難う！ 日が暮れたなあ。みなさんに白状しますがね、私は疲れた。このびつこの足も疼(うづ)いてきて・・・この足にきく薬は何かって？ それはもう、マスカット酒に決ってる。そいつがどこで飲めるかって？ スターラヤ・ガルビヤートナ通りの酒場に行けばある。さあ、スターラヤ・ガルビヤートナへ行こう。(小声で歌いながら、退場しかける。)

ブレンダウワーン(幕の隙間から登場。カンテラを持っている。)
(ベジャールさん、そんなに急がないで。旦那様の手紙ですよ。)

ベジャール(聞こえないふりをする。そして歌いながら先に進む。)
(ラーラーラー・・・)

ブレンダウワーン ねえ、ねえ、旦那様。待って下さいよ。手紙なんです。

ベジャール えっ？ 何だ？ 誰か私を呼んだかな？・・・いや、空耳に違いない。(進む。)

ブレンダウワーン 違いますよ、旦那様。空耳じゃありません。

せん。待つて下さい。私です・・・

ベジャール ああ、君か、ブレンダヴウーン。全然見えなかったな。どうだ？ 調子は。ああ、調子いい・・・それはよかった。じゃ失敬、ブレンダヴウーン。ちょっと急いでいるんでね。

ブレンダヴウーン いいえ、駄目です。あなた様に手紙ですから。

ベジャール ところがね、親愛なる、親愛なるブレンダヴウーン、そいつは私は開けたくないんだ。だって、中味が何か、ちゃんと分っているんでね。

ブレンダヴウーン でも、手紙だけじゃないんです。包みもあるんです。

ベジャール 包み・・・いよいよ駄目だね。包みなら「役」だ。「役」に決っている。何度となくやられたからな、包みで役をあてられるのは。特にその結び方、実にそれらしい。ひどく投げやりな結び方だ。ああ、全く、その縄で首でも吊つてしまいたい気分だよ。まあいい、とにかく明日の朝まで待とうじゃないか。哲学者がよく言うだろう？ 夜より朝の方がずっと賢明だつてな。まあ、石橋も叩いて渡つて初めて安心なんだ。

ブレンダヴウーン ええ、分ります。分ります。私だつて、哲学するのは大好きなんです。でも今は、残念ながらその時間はありません。なにしろ親方からの命令なんです。どうしてもこの仕事を、それも一刻も早くあなた様に引き受けて貰えと。

ベジャール フン、一刻も早くか。（手紙を開ける。）やつ

ぱり思つていた通りだ。実に御苦労だつたなあ、ブレンダヴウーン。今夜は酒場は止めだ。さらば、スターラヤ・ガルビヤートニヤ！ なあブレンダヴウーン、この手紙の走り使いに感謝して、ひとつ役を引き受けてくれんか。

ブレンダヴウーン 滅相（めつそう）もない、旦那様。私は舞台上に立つたことは、今まで一度もありませんで・・・

ベジャール だから余計面白いじゃないか。

ブレンダヴウーン とんでもない。私は役者ではありません。親方の召使いなんです。

ベジャール 召使いだつて芝居をすればいいんだ。親方、モリエール様がお書きになつているものには、必ずお前のことが出て来るじゃないか。まあいい、お前にぐだぐだ言つてもこつちが疲れるだけだ。さあ、みんなを呼んで来てくれ。

（ブレンダヴウーン、幕の隙間から退場。音楽、小さくなる。）₂

ベジャール シャンボールか。全く何て貧弱なんだ、この私の想像力は。マスカット酒をたらふく飲んでいる自分が何故想像出来ん。ああ、あの酒場で友達と楽しく話している自分、さいころで一勝負やつている自分・・・こんな時、詩の女神とよろしくかたらつて芝居をうつつていう気分には全くなれないな。・・・ああ、幕だ。

（幕が開く。舞台は真暗。）

ベジャール 明りだ、ブレンダヴウーン。明りを持て！

おお、ぼつかり開いた口よ。二十年間というもの、お前は私の私をその口の中に飲み込んで来た。今日もまた私は、お前を避けることが出来ぬ。・・・フム、どうも声の調子がよくない。・・・お前、絶望と靈感の源、暗い口よ。・・・貰つ、

何時になったら出て来るんだ。

(ハッチが開く。そこから登場人物達が、カンテラを持って上がって来る。)

ユベール 何の用だ、ちんば、呼び出したのは。

ベジャール 新しい芝居だ。シャンポールで王様に明日見せることになっている。丁度親方が病気になってしまった。リハーサルは私が指揮する。おいおい、そんなに一度に怒鳴られちゃ、何も聞こえない。ブレンダヴワーン、お前がプリンプターだ。

ブレンダヴワーン はい、分りました。

ベジャール よし。じゃ、手短かに言う。親方は病気だ。

従って、主役のジュルジヨーンは私がやる。肝心なところは、私が気違いになるということだ。

ユベール ずっと前からそいつは気がついていた。

ベジャール ユベール! . . . 私が言いたかったのはだ、私、つまり、パリの裕福な町人ジュルジヨーンは、貴族になりたいという気違いじみた行動をとるとのことだ。(モリエール夫人に。) 親方の奥さん、あなたはリュスイーリ. . . 私、ジュルジヨーンの娘だ。現実の生活におけると同様、魅力的な女性。

(モリエール夫人退場。)

ベジャール(ラグランジュに。) お前、ラグランジュは、クレオント. . . 女に惚れる役だ。

(ラグランジュ退場。)

ベジャール チェールビイ夫人. . . あんたは侯爵夫人、ドリメーナをやる。嘘つきで狡(ずる)い女。現実のあんた

とはまるで違う。

(チェールビイ夫人退場。)

ベジャール ラトリリエール、お前には詐欺師ドララントをやって貰う。申し訳ないが。

(ラトリリエール退場。)

ベジャール ボヴァーリ夫人! あんたはリュスイーリの召使、ニコリだ。特に言うことはない。

(ボヴァーリ夫人退場。)

ベジャール チュ・クルワズイ. . . 哲学者、術学者、口煩(うるさ)い教師、パンクラス。

チュ・クルワズイ 失礼だが、ちょっとそれだけでは短か過ぎる。どういう役だか、もう少し知りたいね。

ベジャール フィリペール、私がお前に何か教える? 教師なんてもの、お前が一番よく知っているだろう? かつら、可笑しな帽子、それに雨がっぱ。さあ、ハッチから消えろ。

チュ・クルワズイ。

(チュ・クルワズイ、ハッチに入る。すぐに「術学者」の姿で飛び出して来る。)

ベジャール そうそう、お前さんは仕事早いので有名だからな。

(チュ・クルワズイ、消える。)

ベジャール(残った役者のうちの一人に。) カヴィエーリ、お前はカヴィエーリをやる。クレオントの召使. . . 狡猾(ずるがしこ)い男の役だ。

(カヴィエーリ、消える。)

ベジャール(三人の役者に。) 最後にチェールビイとあと

二人・・・フェンシングの教師 音楽と芝居の教師、それに、ダンスの教師だ。可哀想なジュールジョーンにびったりくっついて、ことある毎に金を巻き上げる。ありとあらゆる技をやったのけてな。

(三人、消える。)

ベジャール フム・・・仕立屋、公証人、踊り手達・・・みんな揃っているな・・・ブレンダヴワーン！ 魔法の照明だ！ ジュルジョーン様を引き立ててくれ！

(場、魔法のように変化する。)

ユベール 私はひょっとして、役なしで？

ベジャール 冗談じゃない、ユベール。お前は私の古くからの忠実な妻だ。(ユベールを抱擁し、三度キスをする。)

ユベール あーあ、女の役は飽き飽きだなあ！(ハッチから消える。)

ベジャール ブレンダヴワーン、ズボンを脱がしてくれ。

(ブレンダヴワーン、ベジャールのズボンを脱がす。)

ベジャール ああ、そうそう、ここには観客のみなさんがいらっしやる。それを忘れていた。ブレンダヴワーン、さ、我々は寢室だ。皆さん、ちょっと御説明を・・・朝が来るんです。ジュールジョーン様の日が始まるのです。音楽の教師が幕の隙間(すきま)から、ブレンダヴワーンがジュールジョーンの着替えを手伝っているのを覗き見しています。さあ、芝居の始まりです。

(ベジャール、ブレンダヴワーンと扉の後ろに隠れる。音楽の教師、観客に背を向けて、幕の隙間から覗く。別の扉が開き、ダンスの教師登場。)

ダンスの教師(一人言で。) おお、ここだ。もういたぞ。素早いもんだ。(大きな声で。) お早う。

音楽の教師(隙間から目を離さず。) お早う。

ダンスの教師(スツールの上に立って中を覗きながら。) 何か見えるか？

音楽の教師 今、ブレンダヴワーンが旦那にズボンをはかせているところだ。真っ赤なやつをね。

ダンスの教師 フン、真っ赤なズボンか。(間。) ああ、君ね、見ると、毎日ジュールジョーンの旦那のところに来ていろいろだな。

音楽の教師 そうだよ。君だってそうじゃないか。

ダンスの教師 だけど君は、朝、まだあけぬうちからっていうやつだぞ。朝っぱらからセレナーデを聞かされるのはうれしくないんでね。

音楽の教師 それは勿論、君としてはあのお客が音楽を習うよりダンスをしたい、って言うてくれた方が嬉しいだろうがね。

ダンスの教師 それは大声を張り上げるよりはよっぽどダンスの方が役に立つさ。

音楽の教師 そうそう、役に立つ、役に立つ、ダンスの方がね・・・足を引っ張ったり伸ばしたり、朝早くから御苦労なこつた。

(間。)

ダンスの教師(囁き声で。) どうやら我々は、喧嘩をしない方がよさそつだ・・・そつだな？

音楽の教師 今分つたのか？

ダンスの教師 うん・・・私の考えを言おう。この旦那が気が狂つてから、次から次と旦那の尻を追いかける奴が現れて、今では大変な数だ。だから、ここで二人が喧嘩なんかすれば、損をするのは我々だ。誰か別の奴に我々の出場（では）を取られる訳だからな。

音楽の教師 おお、頭がいい、あんたは。

ダンスの教師 お褒めの言葉、いたみ入る。では、手を握るんだな？ 二人は。

音楽の教師 うん、手を握ろう。

ダンスの教師 私は、例えば、あの長剣を佩（は）いた、のっぽのおべつか使いが嫌いだね。

音楽の教師 フェンシングの教師か？

ダンスの教師 そう。あいつは何としても追い出してくれねば・・・シッ・・・ジュルジョーンだ。

（堂々とジュルジョーン登場 その後ろにブレンダヴワーン。）

ジュルジョーン お早う、教師諸君。

二人の教師 御機嫌麗（うるわ）しう、旦那様。

ジュルジョーン お待たせしてしまつたようだな、諸君。しかし悪いのは私ではない。仕立屋だ。あいつめ、仕立屋じゃない。アホテヤだ。こんなきついズボンを作りおつて・・・

動こうにも動きがとれん。どうだ？ 諸君、このズボンは。音楽の教師 申し分のない出来栄（できばえ）で。

ジュルジョーン 貴族仲間の錚々（そうそう）たる連中は、朝は必ずこういうズボンを穿くのだ。だからこれは、私の朝

のズボン。

ダンスの教師 とてもお似合いで・・・特にそのお顔に・・・

ジュルジョーン 有難う。さて、今日の舞台関係の授業は、何から始めるのかな？

音楽の教師 まづは最初に、旦那様、セレナーデから。これは私共音楽教師仲間の一人が作曲したもので・・・

ジュルジョーン 大変よろしい。ブレンダヴワーン！

ブレンダヴワーン 何御用で？ 旦那様。

ジュルジョーン 何も用はない。お前がいるかどうか確かめただけだ。いや、まあいい。私にガウンをかけてくれ。

（ブレンダヴワーン、ジュルジョーンにガウンを着せる。）

ジュルジョーン ブレンダヴワーン！ ガウンはとつてくれ。考えが変つた。・・・よし。さてと、セレナーデを聞くぞ。

（二番目の幕が開く。そこはステージになっていて、男性及び女性の歌手達が並んでいる。弦楽器の伴奏で歌う。）

歌手達 ああ、この苦しみ・・・昼も夜も・・・

どんな人の慰めも、何の助けにもならぬ。

ああ、イリースよ、素晴らしいイリース・・・

ジュルジョーン ああ・・・糞っ！ もう我慢ならん！

（歌、急に止む。）

音楽の教師 どうもすみません、旦那様・・・

ジュルジョーン あの野郎、靴屋じゃないぞ、あいつは。

いかさま野郎だ。こんなにきつくちや、もう我慢ならん。ブレンダヴワーン、靴を脱がせてくれ。・・・さ、続けてくれ、諸君。

歌 素敵な、素敵な、イリースよ。

私の心臓は血に濡れている。

ああ、あなたへの愛で、私の命はもう・・・

音楽の教師 如何です？ この歌は。

ジュルジョーン うん、少し暗いな。墓場へ引つ張られて行くようだ。正直言って、これを習おうとは思わん。このところ毎日、私が聞いている歌がある。実に良い歌だ。(歌う。)

ああ、あの可愛いジャンネットはもういない。

愛したんだ私は、あのジャンネットを。

ジャンネットの奴、私を誘(おび)きよせて、

そして私を捨てちゃった。

いい歌だろう。

ダンスの教師 素晴らしいです。可愛いし、それに簡単です。

ジュルジョーン で、私の歌い方は？

音楽の教師 それはもう完璧で。申し分ありません。ではこれを習うことに・・・

ジュルジョーン うん、歌はこれでいい。次はダンスだ。

ダンスの教師 では、メヌエットを。

ジュルジョーン よーし、大好きなんだ、メヌエットは。

(メヌエットが演奏される。男女の踊り手達、踊る。)

ダンスの教師 さあ旦那様、位置について。・・・後に

いて下さい・・・

(全員歌う。ラーラーラー・・・)

ジュルジョーン 実はな、私は少し恥づかしいのだ。びっ

こだからな。

ダンスの教師 びっこ？ 誰のこと？ 旦那様が？・・・

どうしてそんなことを、旦那様。

ジュルジョーン まさかびっこが見えないとでも？

音楽の教師 びっこなどと・・・気づきませせん。

ダンスの教師 さあ、行きますよ。ア、ラーラーラーライ。

・肩を揺すらないで、爪先を上げて・・・ア、ラーラーラー

ラー・・・

音楽の教師 プラーヴァ・・・プラーヴァ

(フェンシングの教師登場)

フェンシングの教師 お早うございます、ジュルジョーン

殿。

ジュルジョーン あー。

ダンスの教師(音楽の教師に。) 現れおったぞ、ごろつき

が。

ジュルジョーン よーし。では諸君、次はフェンシングの

授業・・・

フェンシングの教師 はーん、これはけしからん。フェ

ンシングの授業の前にダンスをやったな。疲れてしまっ

ないか。

ダンスの教師 憚りさま。ダンスをしたって疲れるなんて

ことはありません。フェンシングですよ、疲れるのは。

フェンシングの教師 いいですか、ジュルジョーン殿。こ

んな、ダンスの教師ごときの言葉を聞いてはなりませんぞ。

ダンスの教師 旦那様、いいですね？ 聞くんじゃありま

せんよ、こんなチャンバラの教師の言うことなんか。

ジュルジョーン さあさあ、諸君、喧嘩は止めよう。ちゃ

んとした人間なら、ダンスもフェンシングも両立させる筈で

すよ。

フェンシングの教師 では、ジュルジョーン殿、どうぞ刀

を。お辞儀をして……身体を立てて……頭を真直ぐ立てて……そつです。……一、二(こう言いながら、刀を左右に振る。)さ、始めます。……突いて……その突き、失敗……(ジュルジョーンを突く。)

ジュルジョーン おお、突かれた……

フェンシングの教師 もう一度……一、二……突いて……その突き、失敗……(ジュルジョーンを突く。)

ジュルジョーン ああ、聖母マリア様……

フェンシングの教師 さ、下つて……突いて……その突き、失敗。(ジュルジョーンを突く。)

ジュルジョーン ああ、神様……

フェンシングの教師 助けてくれませんか、神様も。前に跳んで……突いて!……その突き、失敗。(ジュルジョーンを突く。)

ジュルジョーン(突く。花瓶を割る。)おお!……

フェンシングの教師 上手な突き!(ジュルジョーンを突く。ジュルジョーンの胴着、切れて、口が開く。)

ジュルジョーン(床に坐つて。)参りました。降参です!

フェンシングの教師 よろしい。今回はこのぐらいでよいでしょう。分りましたな? ジュルジョーン殿。フェンシングの技術とはいかなるものか。

ジュルジョーン 分りました。分りました。

フェンシングの教師 フェンシングの技術というものは、こんな、ダンスだとか、音楽だとかの技術よりはずっとずっと高級なものですからな。

ジュルジョーン 諸君、ちょっと失礼。私は胴着を替えて

来ます。ブレンダヴァーン!(ブレンダヴァーンと共に退場)(間。)

ダンスの教師 あんた、今、ダンスよりフェンシングの技術の方がずっと高級だと言つたな。

フェンシングの教師 言つた。

音楽の教師 それから、音楽や芝居よりも高級だと。

フェンシングの教師 言つた。

ダンスの教師 厚かましい。何て話だ!

フェンシングの教師 何が厚かましいだ。それが分らぬのはそつちが馬鹿だからだ。

ダンスの教師 失敬な。殴るぞ。

音楽の教師 こつちも加勢だ。

フェンシングの教師 殴る? 面白い。やってみな。

ダンスの教師 やつてやるとも!

フェンシングの教師 ほら、ほら、やってみな!

ダンスの教師 やるさ、やるとも!

フェンシングの教師 ほらほら……ほらほら……

ダンスの教師 そつちが言つたんだからな。(フェンシングの教師を殴る。)

音楽の教師 そつだ、そつだ!

フェンシングの教師 よーし。お辞儀。身体を立てて。一、

二……突き!

音楽の教師(後ろへ下がつて。)その突き、失敗!(フェンシングの教師を殴る。)

(ダンスの教師 フェンシングの教師から刀を奪い、殴る。)

フェンシングの教師(叫ぶ。)助けてくれ! 人殺し!

ニコリ（登場して。）あら、まあ！ 何てこと！（叫びながら退場。）旦那様！ 旦那様！ 先生同志が喧嘩です！

ジュルジョーン（別の胸着に着替えて、走って登場。）諸君！ 諸君！ 何をやっているんです！ 落着いて！

（照明が変る。ハッチから哲学者パンクラス登場。）

パンクラス 何ですか、この喧嘩は。この騒ぎは。私には人間の殺しあいのように見えますが。

ジュルジョーン 全くその通りだ、哲学者先生。二人してこの人を危なく殺すところだったんです。諸君！・・・ああ、哲学者先生、お願いです。三人を鎮めてやって下さい。・・・諸君、御紹介する。こちらは私の哲学の先生、パンクラスさんだ。

パンクラス 分かりました。三人は私にお任せを。（フェンシングの教師に。）どうしました？ あなた。

フェンシングの教師（泣きながら。）二人で私をやっつけるんです。

ジュルジョーン どうしてやり返さないんです？ フェンシングの先生でしょう？

フェンシングの教師 よーし、二人とも思い知らせてやる。裁判沙汰にしてやるぞ！

パンクラス お静かに！ その前にあなた、あなたのその表現方法に問題があります。「二人が私をやっつける」はいいけません。「二人が私をやっつけるように思われる」と言わなければ。

フェンシングの教師 何ですって？「思われる」・・・ですと？

ジュルジョーン さあさあ、この椅子に坐って。いいですか。この先生はとんでもなく立派な先生ですからね。すぐちゃんと説明してくれます。

フェンシングの教師 「思われる」・・・何が「思われる」だ！

パンクラス いいですか、あなた。哲学は我々に教えてくれています。決定的な判断というものは存在し得ない、とね。ですから、あなたにはある何かが、そういう風に見えたかもしれない。しかし、実際はそんなものは全く存在しなかつた可能性があるので。

ジュルジョーン ほーら、見て御覧なさい。

フェンシングの教師 何が「見て御覧なさい」です。戯言（たわごと）じゃないですか、そんなのは。

パンクラス そうそう、その通り。あなたにはこれが「戯言のように見える」訳です。

ジュルジョーン ほーら、言った通り。素晴らしい解説。

フェンシングの教師 しかし、失礼ですが、これ、これを見て下さい。殴られた証拠に、痣（あざ）が出来ています！

パンクラス あなたには、それが、痣であるかのように見えるのです。

フェンシングの教師 何という寝言だ！ 全くとぼけたことを！

パンクラス そう、あなたには寝言に思われ、とぼけたことのように、思われるんです。でもすぐに分ります。さあ、あつたことを私に述べて下さい。

フェンシングの教師 それはもう・・・いいですか、この

二人のろくでなしが・・・

音楽の教師 ろくでなし？

ダンスの教師（音楽の教師と同時に。）ろくでなしはそっちだ！

ジュルジョーン お静かに！ お静かに！

パンクラーズ その前にまづ、あなたはどついう舌で・・・何語で、私に述べようとしておられるのか、それから伺いましょう。

フェンシングの教師 何語もへちまもあるか。この口から出た言葉でやるまでだ。

パンクラーズ あなた、お分りになっていないようですね。

ジュルジョーン あなた、お分りになっていないようですね。

パンクラーズ 「どついう舌で」・・・つまり「どついう

言葉で」ということです。ギリシャ語で？

ジュルジョーン おお・・・ギリシャ語・・・

フェンシング教師 いや。

パンクラーズ ラテン語で？

フェンシングの教師 いや。

パンクラーズ シリア語で？

フェンシングの教師 いや。

パンクラーズ ユダヤ語で？

フェンシングの教師 いや。

パンクラーズ アラブ語で？ さあ、さあ、何語で？

フェンシングの教師 何語と言われても・・・

パンクラーズ イタリア語、スペイン語、英語、ドイツ語？

フェンシングの教師 いや、母国語で。

パンクラーズ ああ、何だ、母国語か。それならこつちに来て。この右の耳に頼みますよ。左側の耳は外国語用でしてな。右の耳は母国語専用になっていますから。

フェンシングの教師 あんたは阿呆（あほう）だ。哲学者なんかじゃない。

パンクラーズ 阿呆・・・そつ、お前さんにはそつ見える、ということ。

ジュルジョーン そつ。そつ見えるということだ。

フェンシングの教師 阿呆！（パンクラーズに唾を吐きかける。）

ジュルジョーン 何ていうこと！ 哲学者先生、どうかお許しを。

パンクラーズ いや、大丈夫、大丈夫。届かなかつた。

フェンシングの教師 何だあんたは。それでも人間か！

（フェンシングの教師、パンクラーズに飛びかかる。）

（ジュルジョーン、止めようと進み出て、平手打ちを食つ。）

ジュルジョーン 何をする！ どついうつもりだ！

パンクラーズ いやいや、どつがお気になさらず。私にはかすりもしなかつた。

ジュルジョーン 失礼ですが・・・

パンクラーズ いやいや、とにかく大事なことは、怒らなということだ。

ジュルジョーン 怒つたりするものか。おい、その二人。

このオタンコナスを連れて行け！ もう二度とこの家の敷居を跨（また）ぐことはならん！

音楽の教師 承知しました。

ダンスの教師（音楽の教師と同時に。）引き受けました、喜んで。

（音楽の教師とダンスの教師、フェンシングの教師を引つ立てて、退場。）

パンクラース 怒らないで、怒らないで、ジュールジョーン殿。

ジュールジョーン 怒ってなんかいません。・・・糞つ、あのアンポンタン！

パンクラース さてと、今日は何をおやりになりますか？

ジュールジョーン それがその・・・実は・・・私は今、好きな女がいます。・・・先生はこういうことをどう御覧になりましょうか・・・

パンクラース それは、そういうこともあるでしょうな。

ジュールジョーン それが・・・実に魅力的な女性です。・・・パンクラース それは、そういうこともあるでしょうな。

ジュールジョーン で、その女性にラブレターを出したいのですが。

パンクラース それは、そういうこともあるでしょうな。詩で？ それとも散文で？

ジュールジョーン 詩でもなく散文でもなく・・・

パンクラース ああ、そういうことはあり得ないのです。ジュールジョーン 何故です。

パンクラース 詩か、さもなければ散文。それ以外には何もありません。詩か散文でなければ、話すことも出来なければ、ましてや、文章を書くことも出来ません。

ジュールジョーン これは驚きました。大発見です。ではお訊きしますが、お芝居ではどうなっているんでしょう。私はお芝居でやるように綺麗なラブレターを書きたいんですから。パンクラース 芝居？・・・それは散文もありますし、詩もありますよ。

ジュールジョーン 音楽とお芝居の先生！

音楽の教師（登場して。） はいはい・・・ここです。ここにありますよ、旦那様。

ジュールジョーン すまないがね、散文だけで出来ている芝居を何か見せてくれないか。

音楽の教師 お安い御用です、旦那様。そつ、モリエール作「ドン・ジュアーン」の最後のお見せ致します。

ジュールジョーン 哲学者先生、どうかその椅子にお坐りになって・・・

音楽の教師 それではジュールジョーン旦那様のために、「ドン・ジュアーン」の最後の場を。（照明変化する。幕が開く。場にドン・ジュアーン。騎士団長の彫像、登場。）

騎士団長の彫像 待てドン・ジュアーン。昨日お前は、わしと夕食を共にすることを約束した筈だ。

ドン・ジュアーン 分っている。どこへ行く。

騎士団長の彫像 その手を貸せ。

ドン・ジュアーン 手を？・・・そら。

騎士団長の彫像 ドン・ジュアーン、持って生まれたお前のその性悪の根性が、恐ろしい死へとお前を導くのだ！

ドン・ジュアーン おお、これは何だ！ 目に見えない火

がジリジリと私を焼いて行く・・・

ジュルジョーン これが散文？

パンクラーズ そう、散文です。

ジュルジョーン夫人（突然登場して、彫像に怒鳴る。）あつちへ行け！

騎士団長の彫像 何です？ これは誰なんです。

ジュルジョーン夫人（ドン・ジュアーンと彫像に。）出て行け！ 今すぐ・・・今すぐ、この家から出て行くんです！

あの穴から落ちて行け！

（ドン・ジュアーンと彫像、ハッチチから退場。）

パンクラーズ 見たところどうやら、これはジュルジョーン殿の奥方のように見えますが。

ジュルジョーン 残念ながら、これは「見える」ではすまされない。今度ばかりは「奥方」そのもの。ああお前、頼むよ。散文で先生方のことを悪く言つのはよしてくれ！

ジュルジョーン夫人 何ですか、あなた。こんなやくざなことを。それも自分の家で！

ジュルジョーン やくざなこと？ 何がやくざなことだ。

ただ「ドン・ジュアーン」を見ていただけじゃないか。

ジュルジョーン夫人 家で一番良い花瓶を割って・・・それも「ドン・ジュアーン」でしよう。さっきの馬鹿騒ぎ・・・足を踏み鳴らして、まるで馬・・・あれも「ドン・ジュアーン」ね！ この家で一体何をしようつていうの、本当に。

ジュルジョーン おお、おお、可愛いお前。落着いて。ね、落着いて・・・

ジュルジョーン夫人 何が「可愛い」の、何が「可愛いお

前」なの！ ただ私をからかっているだけでしよう！ 全くあんたつていう人は！ 性懲りもないオタンチン！

ジュルジョーン まあざつとこんなもんです、哲学者先生、

うちでの散文のやりとりは。で、今度はこちらの耳に切り替えて・・・切り替えはやはり駄目か・・・

パンクラーズ まあまあ、どうか奥方・・・怒らないで・・・

ジュルジョーン夫人 またこの馬鹿が口を出す！

ジュルジョーン お前、何てことを！ これは哲学者パンクラーズ先生だぞ。（パンクラーズに。）先生、授業はまた別の機会に。今日のところはこれで・・・

パンクラーズ そうですな。見たところ、これではちよつと・・・では、失礼しますよ、ジュルジョーン殿。（退場。）

ジュルジョーン夫人 一体何よ、これ！ 恥さらしな！

自分のことを偉い貴族だなどと思い始めてからこつち、すつかりあんたは気が狂つたの。朝つぱらからどんちゃん騒ぎ。何がお芝居！ 何が音楽！ 近所の人の物笑いよ。それで自分はやんとした人間のつもり！ すつかり頭がいかれてしまつて！ ゆっくり椅子にでも坐つていればいいものを、馬鹿騒ぎで何をしようつていうの！

ジュルジョーン 黙れ！ 無学な女め！

ジュルジョーン夫人 無学な女？ よく言つたわね。そつちこそ何よ！ 家の中にならず者というならず者を呼び込んで。レースつきのズボンを穿いたあんな名つてのペテン師を引つ張つて来て、何のいいことがあるつていうの！ ああい

う人間をね、イカサマつて言つたよ！

ジュルジョーン 何だと？ イカサマだと？

ジュルジョーン 何だと？ イカサマだと？

ブレンダウヴァーン（登場して。）侯爵、ドララント様です。
ジュルジョーン シーツ、黙るんだ、今は。

ドララント（登場して。）これはこれは、お懐かしいジュルジョーン殿。まづお訊ねします、御健康でいらっしやいましょうか。

ジュルジョーン おお、これは侯爵殿。何という光栄。私の健康のことをお訊ねで？・・・いや、実に、健康そのもので・・・

ドララント しかしジュルジョーン殿、まづはともあれ、どうかお帽子を！ お帽子をお被りになりませんか？・・・そのままではお風邪をお召しになってしまいます。

ジュルジョーン いえいえ、とんでもない、侯爵殿。（無帽のままにいる。）

ドララント ジュルジョーン殿、それでは私から少し離れて下さいとお願ひするようなはめに・・・

ジュルジョーン えっ？ 私が離れなければ？・・・それはもう、帽子を被ることに致します。

ドララント おお、何という御立派ないでたち！ 朝早くからこのように立派な衣装を身につけておられる・・・そのような方には滅多にお目にはかかれせん。やっと宮中の近衛の騎士の方々ぐらいでしょう。

ジュルジョーン えっ？ 私が宮中の近衛の騎士に似ていると言つて下さるのですか？

ドララント もし似ていないなどということがあるものなら、この舌がなくなつても構いません。

ジュルジョーン 侯爵殿の舌がなくなる・・・そんなこと

が起きようものなら、この私が死んでしまつてしよう。

ドララント ジュルジョーン殿がお亡くなりになる・・・そんなことが起きようものなら、この私が死んでしまつてしよう。勿論悲しみのために。どうかジュルジョーン殿、あなた様に接吻することを私めにお許し下さいますよう。

ジュルジョーン とんでもない。私がそのような光栄に浴することはとても出来ないことです。

ドララント いえいえ、今朝私は、目を覚したとたん、ふと心に浮かんだのです。今日はとても楽しいことが私を待っている・・・そつだ、ジュルジョーン殿に接吻するのだ・・・とね。（ジュルジョーンにキスする。）これで片方の頬、さて、今度はもう片方の頬・・・

ジュルジョーン夫人 全く、何ておべっか使い！

ドララント（ジュルジョーンに。）失礼しますよ。ああ、奥様！ まあ、私としたことが・・・全然奥様に気がつきませんで・・・

ジュルジョーン夫人 いいんですの・・・いいんですの。

ドララント お手をどうか、奥様。・・・どうか・・・

ジュルジョーン夫人 ほつといて下さい。ほつといて・・・

ドララント 奥様は御機嫌ななめでいらっしやる。

（ジュルジョーン夫人、何かぶつぶつと呟く。）

ドララント さあて、親愛なるジュルジョーン殿、実は私はあなたとの勘定を精算しようと思つてやつて来たのです。

ジュルジョーン（小声で、ジュルジョーン夫人に。）ほら、見て御覧。お前は馬鹿なんだから。（ドララントに。）侯爵殿、あんなもの、お気になさることはありません。

ドララント そう仰らずに、ジュールジョーン殿。こういう事では、正確を期すのが私の性分です。ところで、いくらの借りでしたでしょう、私は。

ジュールジョーン 私は記憶が悪くて……たしか……最初は二百ルーブルお渡しした筈で……

ドララント そうそう、全くその通り……

ジュールジョーン その後、たしか三度、私がお支払いしました。一つは仕立屋。これが五千ルーブル……それからお店で……それから馬の鞍の職人のところへ行きました……全部で五千八百ルーブル……

ドララント 全くその通り。さあ、私は今ここに二百ルーブル持つて来ました。これをその一万五千八百に加えると、丁度切りよく、一万六千になります。

ジュールジョーン夫人 何て話！ この悪党！

ドララント 失礼、奥様。今何が仰いましたか？

ジュールジョーン夫人 いいえ、何も。ただ、うちの人が何て馬鹿なんだろうって……

ドララント いえいえ、とんでもない、奥様。御主人は大変聡明な方でいらつしゃいます。

ジュールジョーン夫人 厭な奴！（唾を吐いて退場。）

ジュールジョーン 畏まりました、侯爵殿。今すぐお金を持つて来ます。（退場。）

ドララント（一人になり。）観客の皆さん、酷いものです、この私のやっている事は。特に酷いのは、私がドリメーヌに結婚を申込んでいるのを、あのお馬鹿さんには隠していることです。そしていいようにあのお馬鹿さんに、ドリメーヌを

惚れさせているんですからね。ところで私はドリメーヌと何が何でも結婚しなければなりません。ドリメーヌの財産が私の手に入らないことになりてもしょうものなら、私はたちまち債権者達の手落ちてしまつんです。全く私のこの役は厭な役ですよ。でも他に手の打ちようがないんですから。（登場してきたジュールジョーンに。）ひよつとして、大変御迷惑だったではありませんか？ ジュルジョーン殿。

ジュールジョーン 何の何の、侯爵殿。侯爵殿のためなら、どんなことでも……（金を渡す。）

ドララント 今度は何か、こちらでお役に立てることを……

ジュールジョーン（囁き声で。）実は侯爵殿、……その……例の……

ドララント ああ、半分聞けば私にはちゃんと分ります。

ドリメーヌ侯爵令嬢のことですね？ 愛している、素晴らしい方だ、と仰っている……（一人言で。）よし、次は指輪の話らしいぞ……

ジュールジョーン それで、例の指輪のことなのですが……

ドララント 半分聞けば後は分ります。この間私を通じて、あの方に贈り物として差し上げた、あのダイヤの指輪が、あの方にお気に召したかどうか……それをお聞きになりたい……

ジュールジョーン そうそう、その通り。

ドララント それはもう、大喜びで……

ジュールジョーン じゃ、教えて下さい。いつ……

ドララント 半分聞けば、後は分ります。

ジュールジョーン夫人（静かに登場。）あの子そひそ話は、

どうも気に入らない。(囁き声で。)(ニコーリ！)

(ニコーリ、静かに登場。)

ジュルジョーン夫人(小声で。)(あの二人、何を話しているか、盗み聞きよ！)

ドララント(小声で。)(明日の夕食に、あなたを私の家にお招きします。その時、ドリメー又侯爵令嬢を……)

ジュルジョーン ああ、何という幸せ……まさか、そんな幸せが私を……

ドララント あなたを待っているのです。

ジュルジョーン 長年連れ添ってきたが、あの女房は厄介払いして……(ニコーリのいることに気づき、平手打ちする。)(この馬鹿！(ドララントに。)(さあ、行きましょう。)

(ドララントと共に退場。)

ニコーリ(頬を抑えながら、ジュルジョーン夫人に。)(ほら、奥様……あんな具合です。)

ジュルジョーン夫人 可哀想に、ニコーリ。大変だったね。有難う。で、二人は何の話？

ニコーリ 奥様、旦那様はドリメー又侯爵令嬢とかいう女に、何かよからぬことを企んでいらっしやる御様子ですわ。

ジュルジョーン夫人 あの人でなし！ 結婚してまだ二十四年しか経っていないっていうのに、この私に愛想をつかしたっていうのね！

ニコーリ どうか奥様、お取り乱しにならないで……

ジュルジョーン夫人 取り乱したりしてはいけません。ただ、私は心配、あの人が財産をすっかりなくしてしまっくんじやないか、そして娘に持参金もつけてやれないんじやないかって。

よし、もうこんなことをぐずぐず続けさせる訳にはいかない。さあ、ブレンダヴワーンを呼んで。クレオラントのところへ行かせて。娘との結婚をさっさとすませるの。そうでもしないと、何もかも駄目になってしまう。

ニコーリ 分りました、奥様。すぐ呼んで来ます、急いで。

(ジュルジョーン夫人、退場。)

ニコーリ ブレンダヴワーン、ブレンダヴワーン！

ブレンダヴワーン(登場して。)(何か用か？ニコーリ。)

(ブレンダヴワーン、幕のところに引きかける。)

ニコーリ 奥様のお言い付け。すぐクレオラント様をここへ呼んで来てって。

ブレンダヴワーン いくら奥様のお言い付けだと言っても、呼びに行くことは出来ないな。だってもうこれで幕だ。

ニコーリ(観客に。)(皆様、休憩です。)

(幕)

第二幕

ニコーリ(ブレンダヴワーンに。)(さあ、早く、クレオラント様のところへ行って。)

ブレンダヴワーン おやおや、行く必要などないな。丁度二人でやって来る。

(ブレンダヴワーン退場。)

(クレオラントとカヴィエーリ、登場。)

ニコーリ ああ、なんて間がいいんでしょう、クレオラント様。お呼びしようと、ブレンダヴワーンをやるどころでした。今日は、カヴィエーリ。

クレオント お前なんか、悪魔に食われてしまえ！

ニコリー まあ、何てことを！

クレオント あの裏切者のお嬢様のところへさっさと行け。そして言つてやるんだ、このクレオントは、人様の笑いや者になってすこすこと引き下がるような男じゃないんだとね。

ニコリー まあ、これ、どういうこと？ 何が何だかさっぱり。カヴィエーリ、何なの？ これ。

カヴィエーリ 消えろ、ニコリー。

ニコリー 分りましたわ。旦那様は気が狂うし、この二人も狂っちゃった。奥様に言つて来よう。(走つて退場)

クレオント 誠実で献身的に愛している男に対してとる態度が、あれが。

カヴィエーリ そつです、旦那様。全く何てことでしょう。

私達の恋人は実際こちらを馬鹿にしていますよ。

クレオント カヴィエーリ、お前、誰か私以外の人間で、あの人のことをこんなに優しく、こんなに熱烈に愛している男を知っているか？ 誰でもいい、名前をあげることが出来るか？

カヴィエーリ いません、旦那様。名前なんかあげられっこありません。

クレオント あの人は私は丸二日会っていなかった。それが私には呪わしい二百年にも思われたのだ。そして昨日、ああ、何ていう幸運、街であの人を見かけた。私はあの人に駆け寄つた。・・・ああ、あの時の私の顔・・・どんなことが書いてある顔だった？ カヴィエーリ。

カヴィエーリ 喜びと、そして燃えるような恋の炎・・・

それですね、書いてあったのは。この首を賭けたつていい。

クレオント だろつ？ それがどうだ。あの薄情な女は、私から視線を逸(そ)らし、まるで私に生まれて初めて会つたかのような顔をして、傍を通り過ぎて行つたんだ。何だ一体、これは、カヴィエーリ。

カヴィエーリ しようがありませんよ、旦那様。あのニコリーだって、私に同じ態度をとつたんですからね。

クレオント あの人の膝の上に、私は何度涙をこぼしたことが。そんなことのあつた後で、あれだ！

カヴィエーリ えつ？ 涙ですつて？ 旦那様。私の方は井戸から何度水を運んだか。

クレオント バケツで水？ 何だ、一体。

カヴィエーリ ニコリーのことですよ、これは。

クレオント この胸を恋の炎で、どれだけ焼いたことが！

カヴィエーリ 串に刺した肉を、ぐるぐる、ぐるぐる、(かまど)の上でどれだけ回して焼いたことが。

クレオント 竈(かまど)？ ああ、ニコリーのことが。

カヴィエーリ そつです、旦那様。

クレオント 糞つ！ 怒りの持つて行きどころもない！

カヴィエーリ 持つて行くところなんかありませんよ。

クレオント ああ、あの人を罵(のの)し、つてくれ、カヴィエーリ。あの女の顔の缺點を暴きだして、私にあの女を忘れさせてくれ。

カヴィエーリ 畏まりました、旦那様。あの方は目が小さいですよ、旦那様。

クレオント 何を馬鹿な！ そうか、小さいかもしれ
ない。しかし、その小さな目から出て来る、炎のような光！

カヴィエーリ それに、口は大きいし。

クレオント それは本当だ。しかし、魅力溢（あふ）れ
る口だ。

カヴィエーリ 背は低いし。

クレオント だけど、何て均整のとれた・・・

カヴィエーリ 頭が悪いですよ、あの方は。

クレオント 笑わせるんじゃない。あの繊細な頭脳！

カヴィエーリ 何だ、旦那様。あの人を罵（のの）し、ろ
うとしたってそれじゃ何にもなりませんよ。

クレオント いやいや、頼むからやってくれ。

カヴィエーリ 浮気女ですよ、あの方は。

クレオント いや、今回だけだ。すぐなくなる、浮気な
んか。

カヴィエーリ もういいです、旦那様。私は疲れました。

誰か私以外の人にやらせて下さい。私はもうご免です。

（リュスイーリとニコリー、登場。）

クレオント あっ、私はあれとは話したくないんだ。分
るな？ カヴィエーリ。

カヴィエーリ 分つてます。どうぞ御安心を、旦那様。

リュスイーリ 何なの？ あなたのその態度は、クレオ
ント。

ニコリー どうしたっていつの？ カヴィエーリ。

リュスイーリ 唾（おし）にでもなつたの？ クレオ
ント。

ニコリー あんたもどうしたのよ、カヴィエーリ。言葉を
忘れちゃつたの？

（間。）

クレオント 性悪女とはこういう女を言つんだ！

カヴィエーリ 裏切り者のユダ！

リュスイーリ ニコリー、あなたの言つてたこと、本当ね。

この人達、気が狂つたのよ。ああ、そうそう。昨日のあの出
逢い（あひだ）のことが気になつてゐるのなら、私、今説明する。

クレオント いや、聞きたくない。

ニコリー ねえ、私に説明させて。

カヴィエーリ いやだ。

リュスイーリ 昨日の朝は・・・

クレオント 聞きたくない。

ニコリー 昨日の朝はね・・・

カヴィエーリ そこをどけ！

リュスイーリ クレオント、待つて！

クレオント 嘘、作り話はもう沢山だ。

ニコリー ねえ、聞いてよ、カヴィエーリ。

カヴィエーリ 聞く前から分つてる。嘘に決つてるんだ。

リュスイーリ もういい、聞く耳持たないつて言つのなら。

さあ、行きましよう、ニコリー。

ニコリー 行きましよう、お嬢様。

クレオント そうか。じゃ、聞くよ。昨日のあの態度は

どうしたんだ。

リュスイーリ いいえ、もう私、話したくない。

カヴィエーリ さあ、言つんだ。

ニコリー いいえ。

クレオント お願いだよ。

リュスイーリ 離して頂戴。

カヴィエーリ さあ、さあさあ。

ニコリー いや、いやいや。

クレオント そうか。君は行っちゃうのか。よし、じゃ

いい。つれない人。それなら僕も行っちゃう。そして死ぬん

だ。カヴィエーリ！

カヴィエーリ 旦那様、私もお供します。溺死（できし）
します。

リュスイーリ 待って、クレオント。

ニコリー 待って、カヴィエーリ。

カヴィエーリ 分かりました。待ちます。

リュスイーリ 聞いて。昨日の朝、私、父と一緒に散歩す

ることになったの。父が言うことには、道で決して誰とも接

拶をしてはいかん。相手が侯爵の時だけ挨拶するんだ、と。

だから、あなたに頭を下げるのも怖かったの。

カヴィエーリ なあんだ、そうだったのか。酷い話だ。

クレオント 君、僕を捨てたんじゃなかったんだね？

リュスイーリ。

リュスイーリ 誓ってもいい。違うわ。

クレオント じゃ、僕のこと、愛してる？

リュスイーリ ああ、クレオント！

ニコリー カヴィエーリ！

（二組、キス。）

（足音が聞こえる。リュスイーリとニコリー、走って退場。）

別の扉からジュルジョーン夫人登場。）

ジュルジョーン夫人 ああ、クレオント、会えてよかつたわ。

クレオント 奥様！

ジュルジョーン夫人 ああ、クレオント、私本当に困っているの。

クレオント どうしたんです？ 困ったって。

ジュルジョーン夫人 馬鹿な男が悩みの種なの、クレオント。

クレオント 馬鹿な男・・・悩みの種・・・それは酷いです、奥様。

ジュルジョーン夫人 まあ、私、あなたのことを言っているのではありませんわ、クレオント。

カヴィエーリ じゃ、私のことだ。

ジュルジョーン夫人 馬鹿な男・・・それは私の夫なの。ええ、ええ、こんなこと、認めたくないわ、私。でもあの人、

気が狂ったの。自分が有名な貴族だと思い込んでしまった。だからあなた、今すぐにでも、私の娘と結婚して。あの人

が全財産をはいはたす前に。あの娘（こ）はあなたが好き。それに私もあなたが大変気に入っている。

クレオント ああ、奥様、何て嬉しいお言葉。天にも登る心地です。

ジュルジョーン夫人 さあ、キスして頂戴、クレオント。

（カヴィエーリ、ジュルジョーン夫人にキス。）

ジュルジョーン夫人 あら、あなた！ あなたが私に何か

御用？

カヴィエーリ ああ、奥様、正直なところ、私にも計画があります。私はお宅の小間使い、ニコリーを愛しています。奥様は私達の結婚を邪魔などなさらないでしようね？

ジュルジョーン夫人 邪魔などしませんよ。

(カヴィエーリ、ジュルジョーン夫人にキス。)

ジュルジョーン夫人 お待ちなさい。今あの人を呼びますから。(退場。)

ジュルジョーン(登場して。) ああ、あなたですか！

クレオント ジュルジョーン様、どうかこの願い、お聞き届け下さいますよ。私はお嬢様の連れ合いになり、あなた様の義理の息子になることを、光栄この上もないことと思っております。どうかあなた様のお手にお継(すが)りして、お嬢様との結婚をお許し下さい。伏してお願ひ申し上げます。ジュルジョーン ほほう、これはこれは。しかし、何はともあれ、何語で私とお話しになりたいか、まづそれを伺つてからにしませんと。

クレオント それは、もしお許しが戴けますなら、ジュルジョーン様、母国語で。私は外国語というものが全く駄目です。

ジュルジョーン では、右の耳にお願い致します。母国語はもつぱら右の耳で聞くことしております。左の耳は外国語用で。

クレオント 分りました。(そちらに移る。)

カヴィエーリ 全く、何て話だ！

クレオント では、ジュルジョーン様・・・

ジュルジョーン ちょっとお聞きしますが、私との話は、

詩でなさいますか？ それとも散文で？

クレオント 散文です、もしお許しが戴けますなら。詩ではとても話せませんので。

ジュルジョーン それは残念。では、あなたの散文をお聞きすることに・・・

クレオント つまりその・・・ジュルジョーン様、私は、お嬢様と結婚致したいので！

ジュルジョーン(よく考えてから。)

フム、可能性はありますな。

クレオント お嬢様を御尊敬申し上げているのです、ジュルジョーン様。

ジュルジョーン(ちょっと考えてから。)

フム、それも可能性はある・・・

クレオント(心配になって。)

それで、あなた様は私に何と仰るのでしょうか、ジュルジョーン様。

ジュルジョーン それは不可能・・・と。

クレオント ああ、ジュルジョーン様。

ジュルジョーン お聞きするが、あなたは貴族かな？

クレオント いいえ、ジュルジョーン様、私は貴族ではありません。それははっきりと申し上げます。私は嘘をつくに慣れておりませんので。

(カヴィエーリ、しきりにクレオントに目配せして、ブツブツ言う。)

クレオント 何だ？ お前、その目配せは。

カヴィエーリ(咳をして。)

目配せなど私はしておりません。旦那様の勘違いです。どうかお続け下さい。でも、どう

か言葉にお気をつけて。

クレオント そうです、ジュールジョーン様。私は嘘はつけない。私は貴族ではありません。

カヴィエーリ あーあ、やってしまった！

ジュールジョーン その単刀直入の言葉、大変気に入りました。では、お互いにキスを。

(二人、キスする。)

ジュールジョーン (キスを終えて。) 但し、娘はあなたにはやれん。

クレオント 何故です。

カヴィエーリ 散文ではこうなる運命だ。

ジュールジョーン あの娘は、侯爵にやると固く決めているのでな。では、失礼致しますよ、あなた。召使い達が沢山いて、あれこれ指示を出さねばなりませんのでな。ではこれにて。あなたの恭順な僕(しもべ)ジュールジョーンは、お暇

(いとま) 致します。(退場。)

クレオント (椅子にどっかとお尻をおろして。) どうだ一体カヴィエーリ、このなりゆきは。

カヴィエーリ 詩でお答えするんですか？ それとも散文で？・・・詩にしましょう。旦那様はアンポンタン！

クレオント 何だお前、笑っているのか。

カヴィエーリ これがどうして笑わないでいられますよう。旦那様はこれで一生、独身ですよ。

クレオント しかし、私の口から嘘は言えないよ。

カヴィエーリ 嘘よりももっと、馬鹿の方が厭ですな、私は。旦那様には心からの感謝の言葉を申し上げなければ。結

局のところ、私の話もぶち壊しておしまいになったんですか。あの人は言いましたよ、ニコリーの相手も、侯爵に仕えている召使いでなければ、と。(だんだん怒ってきて。)

全く呆れましたよ、旦那様には。相手は気違いなんですよ。何でも適当に相手になってやるのが務(つと)めじゃありませんか。母国語でならこっちの耳・・・その耳に何でもいい、

言ってやればよかったです！ もう私を首にして下さい。どこかの侯爵の召使いになります。私は結婚したいんですからな。

クレオント カヴィエーリ、それはないよ。裏切り行為だ。こんな酷い目にあっている時に私をおいて行こうなんて。

頼む、カヴィエーリ、何か名案を考えてくれ！

カヴィエーリ しょうがないですね、旦那様。自分では何も考えられない。いつだって考えるのは私なんですから。

(間。)

クレオント カヴィエーリ！

カヴィエーリ 待つて下さい、旦那様。名案が熟してきたところですよ。気遣いが相手なら、どんな手段をとったって・・・

フム、フム・・・よし、これで・・・これで熟しました、名案が。

クレオント カヴィエーリ、お前は天才だ！

カヴィエーリ そう、天才。では旦那様、夕方までには私が旦那様を、有名な人物に仕立て上げます。

クレオント 有名な人物？ また、どうやって・・・カヴィエーリ それはこっちの腹の中に。ではまづ、お金を下さい、旦那様。

クレオント いくら欲しい。

カヴィエーリ 純粋な支出が五十ピストル。それに、私用に十ピストル。

クレオント さあ、これが金だ。

カヴィエーリ ではと、まづ、あの二人の詐欺師、音楽とダンスの教師を誘って私は食事です。旦那様はもう家に帰って私の指示を待っていて下さい。ジュルジョーン殿にうるさくしたらいけませんよ、くれぐれも。(退場)

ジュルジョーン夫人(登場して。) おや、クレオント・・・クレオント(泣く。) ああ、奥様、旦那様は私をお断りに・・・

ジュルジョーン夫人 まさか！ 全くあの人、何を考えているのやら。いいです、私に任せて！(叫ぶ。) ジュルジョーン！ ジュルジョーン！

(クレオント、走って退場。ジュルジョーン夫人に手を振りながら。)

ジュルジョーン(登場して。) どつやらお前、私を呼んだようだな。

ジュルジョーン夫人 あなた、クレオントを断つたのね。何故？ あの人はいい人。それに、あなたの娘を愛してくれているのよ。

ジュルジョーン 私もあの人物は大変気に入っている。

ジュルジョーン夫人 まさかあの人が、ちゃんとした人物でないと言っんじゃないでしょうね。

ジュルジョーン いや、ちゃんとしている。あの男のことを考えれば考えるほど、実に納得だ・・・ちゃんとしている。

ジュルジョーン夫人 リュスイーリがあの人を愛していないとでも？

リュスイーリ(走って登場して。) 私、あの人を愛しているわ。

ジュルジョーン 愛している、愛している。その通りだ。

ジュルジョーン夫人 すると、あの人の方が愛していないとでも？

リュスイーリ いいえ、ちゃんと愛してくれています！

ジュルジョーン そんなに怒鳴ることはない。お前はちゃんと愛されているよ。

ジュルジョーン夫人 あの人には財産もありません。

ジュルジョーン 言うには及ばん。素晴らしい財産だ。

ジュルジョーン夫人 じゃ、何故あなた・・・

ジュルジョーン いや、これだけは譲られん。譲られんのだ。侯爵でないからな。

ニコリー(突然登場して。) で、旦那様、旦那様は侯爵ですか？

ジュルジョーン ああ、お前もか。お前は分っておらんだ。私は残念ながら侯爵ではない。しかし、つきあいは侯爵達とだ。将来もずっと侯爵達だけとつきあうのだ。

ジュルジョーン夫人 私の娘を不幸にすることは、私が許しません。一体誰があの子を生んだと思っているんです。

ジュルジョーン 私だ！ 生んだのは・・・エーイ、糞っ！ 妙なことを言っておって！ お前だ、お前が生んだのだ。私をほっといてくれ！

リュスイーリ 私、クレオントとでなかつたら、誰とも

結婚しません。もしお父様がこの結婚に反対なさるのでしたら、私、お父様とはこれつきり縁を切ります。

ニコリー お嬢様、それだけはおよしになって・・・

ジュルジョーン やれやれ、お前達のうるさいこと！

リュスイーリ（泣く。）ああ、私、何て不幸せ・・・

ジュルジョーン夫人 見て御覧なさい。あなたですよ、娘をこんな目に合わせて・・・

リュスイーリ ママ！ 私、出て行く・・・

ジュルジョーン夫人 どこへ・・・お前、どこへ出て行くつていうんだい！

ニコリー そうです、お嬢様、どこに！

リュスイーリ 身を投げて、私・・・死ぬ・・・でなかつたら、叔母さんのところへ・・・（走って退場。）

ジュルジョーン夫人 ニコリー、来なさい。あの子をほつておいてはいけません。（二人、走って退場。）

ジュルジョーン 御覧下さい、お客様、この気違い一家を！

おい、ブレンダヴワーン！

（ブレンダヴワーン登場。）

ジュルジョーン 頼む、私の頭に湿布（しつぷ）だ。

ブレンダヴワーン 旦那様、侯爵ドラント様がいらつしや

いました。誰か女のお連れの方と・・・

ジュルジョーン ああ、来たか、来たか。やつと来たか。

あの女・・・何て運がいいんだ。家の者が全員出ているとは！

すぐ入つて・・・いやいや、入るのはまだだ。そう、待つ

て貰つて・・・そう、まだ・・・まだだ・・・糞つ、何だ私

のこの服は・・・そう、入つて貰え。そして言つんだ。少々

お待ち下さい、主人はすぐ来ますからと。（退場。）

（ドラントとドリメーナ、登場。）

ドリメーナ ドラント、こんな、知らない人の家に軽はずみにやつて来て・・・私、心配・・・

ドラント おお、可愛いドリメーナ、下らないことを言

うんじゃないよ。誰にも知られないで、君と食事が出来るところが他にどこにあるつていうんだ。分つているだろう？

それは。

ドリメーナ このことだけじゃないのよ、ドラント。私

に贈物を下さるのは、本当にもつ止めにして下さらなければ。

この指輪だつて、どうして私にこんな・・・

ドラント ああ、ドリメーナ！

（ジュルジョーン登場。）

ドラント さあ、われらが親愛なるジュルジョーン殿の

お出ましだ。

ジュルジョーン これはこれは、侯爵令嬢様、お越し戴く

とは全く光栄な・・・いや、お越し戴く光栄にあづかるとは・・・

・このような光栄をお授け下さるとは・・・わが家を御訪問

下さるといふような、この光栄を・・・侯爵令嬢様・・・

ドラント 光栄はもう結構、ジュルジョーン殿。そのよ

うな御挨拶は無用に願いたいとの侯爵令嬢からのお申し出で・・・

・

ドリメーナ ええ、ジュルジョーン様は本当に優雅なお方

ですから、どうぞ御無用に・・・

ドラント（囁き声で、ジュルジョーンに。）実はちよつ

と・・・その・・・この方に差し上げた、例の指輪のことは

決して話題にはいけませんぞ。

ジュルジョーン（囁き声で。）しかし、少なくとも、気に入ったかどうかだけは知りたいものですが・・・

ドラント いやいやいや、それは全く礼儀に反するといふもの。指輪など気がつきもしないという顔をしなければ・・・

ジュルジョーン それは悔しい・・・何とか・・・
（三人、坐る。）

ドリメーナ この指輪が気になっていらつしやるようすわね。本当に素晴らしいものでしょう？

ジュルジョーン 気もつきませんでしたな、指輪など。しかしまあ、無理にでも批評するとなれば、下らない、取るに足らない物ですよ、そんなもの・・・

ドラント（空咳。）クハッ、クハッ、クハッ・・・

ドリメーナ 取るに足らない？ まあ、ジュルジョーン様つて、随分へそ曲がりの方なんですのね。

ジュルジョーン 手に入れようたって、このような指輪は、とてもとても・・・

ドリメーナ あら・・・？

ドラント（独り言。）糞つたれ！

（ブレンダヴワーン登場。湿った布切れを持って来て、ジュルジョーンの額に当てる。）

ジュルジョーン 何だ、これは。

ブレンダヴワーン 湿布です、旦那様。

ジュルジョーン（囁き声で。）とっとと出て行け、この馬鹿・・・

（ブレンダヴワーン退場。）

ジュルジョーン どうぞ、お気になさらないで、侯爵令嬢殿。あの召使はちょっと気がふれておりますので。ブレンダヴワーン！

（ブレンダヴワーン登場。）

ブレンダヴワーン 何御用で？

ジュルジョーン 食事はどうした。

ブレンダヴワーン すっかり用意が整っております。

ジュルジョーン 皆様、どうか皆様を御招待・・・申しあげる光栄を・・・お許し下さいますよう・・・どうか、お食事・・・ささやかな私の気持・・・どうか・・・

ドリメーナ ジュルジョーン様 感謝致しますわ、本当に・・・

ジュルジョーン おい、音楽だ！ 食事だ！

（ステージに音楽家達現れる。床から豪勢に設（しつら）えられたテーブルが上る。テーブルには四人のコックがついている。コック達、踊りながら食事の用意をする。）

ジュルジョーン 侯爵令嬢様、さあ、どうぞ！

ドリメーナ お宅では何て豪華にしつらえられているんでしょう！

ドラント 侯爵令嬢、ジュルジョーン殿は、我々がここで食事をすることを大変光栄に思ってくれていて・・・

ジュルジョーン これしきの食事、なんのその・・・

ドリメーナ 繰り返しますけれど、ジュルジョーン様、あなたつて、随分へそ曲がり・・・

ドラント さあ、侯爵令嬢、ワインを・・・

ドリメーナ 何ていい香り・・・

ドララント 素晴らしいワインだ！

ブレンダヴワーン これしきのワイン、何のその！

ジュルジョーン おい、ブレンダヴワーン、やり過ぎだぞ。

ブレンダヴワーン いえいえ、これしきのこと、何のその！

ジュルジョーン さあ、次の料理だ！

ドララント 楽しみだぞ、この気前のよい御亭主が、次にどんな料理をふるまってくれるか……

ジュルジョーン 見ていて下さい。料理人の秘密なんです。

(床からテーブルが飛び上がる。その上にジュルジョーン夫人が坐っている。)

ジュルジョーン おお、これは！

(間)

ジュルジョーン夫人 まあまあ、結構なお客様ですこと。

女主(おんなあるじ)が留守の時、亭主がやることはこれ……

どこかの陽気な遊び女とその色男を連れ込んで、財産を張り込んで豪華な食事……やれやれ、呆れたもの！ 全く呆れ返つてもものも言えない！

ジュルジョーン ああ、ぶち壊した！

ドララント 奥様、何ていう事、何ていう言い方です、それは。第一、この食事は私持ちです。決してジュルジョーン

殿の……

ジュルジョーン夫人 お黙りなさい、この胡麻の蠅(ごまのはえ)！

ドララント 奥様！

ジュルジョーン夫人 何が奥様！

奥様が聞いて呆れる！

私はね、二十三年、ちゃんと奥様をやつて来たの！ 私が

あんたの何が奥様！ 恥づかしくないの、あんたは。のこのこ他人(ひと)の家に押しかけて……おまけに食事！

ジュルジョーン ああーっ、駄目だ、これは。

ドリメーナ 何て話でしょう。ああ、ドララント、お願い！

ドララント 落着いて、お願いだ、ドリメーナ。

ドリメーナ 今すぐ、今すぐ、ここから連れ出して、私を！

ドララント(ジュルジョーン夫人に) 恥を知りなさい、

あなた！

ジュルジョーン めちゃめちゃだ……ぶっ壊した！

(ドララント、泣きじゃくるドリメーナを連れて退場。)

ブレンダヴワーン テーブルを片づけましょうか？ 旦那様。

ジュルジョーン そうしてくれ。(ジュルジョーン夫人を指差して) あいつも……テーブルも……みんな片づけ

る……ああ、とんだ恥かきだ……

ブレンダヴワーン 湿布をお持ちしましょうか、旦那様。

ジュルジョーン 糞っ！ 地獄へ落ちてしまえ！

ブレンダヴワーン 地獄へ？……よろしうございます、

旦那様。丁度時刻もお詔(あつら)え向き……二幕の終で

す。

(幕)

第三幕

(夜。ジュルジョーン一人。)

ジュルジョーン(悲しそうに) あーあ、女房のやつにどでかい一発を食(くら)ってしまった。やれやれ。あーあ……

恥づかしくて、人に会うことも出来ない。それに連中もあれからすぐこの私を忘れてしまったよつだ。……誰も訪ねて来る者はいない。……教師連もどこへ雲がくれしたか、さっぱりだ。……哲学でもしてみるか……。あのパンクラース先生……。たいした人物だったなあ……。あの人の言葉を聞くとはつとしたものだ。……それに哲学……。実に立派な学問だ。……そうだ、確かにあの食事……。あのスキヤンダル……。あんなものは存在しなかった……。ただ私にそう見えただけのことだったかもしれない……。そうだ、私の心にこれを吹き込む必要がある。……。スキヤンダルはなかった……。スキヤンダルはあつたなあ。哲学をしても、ちつとも面白くない。……。そうか、メヌエツトでも踊るか。おい！ プレンダヴウー
ン！

プレンドヴウーン（登場して。）何御用で？ 旦那様。
ジュルジョーン 面白くないんだ、私は、プレンドヴウー
ン。

プレンドヴウーン では何か、お召し上がりには？
ジュルジョーン いや、何も欲しくない。奥さんは今、留
守か？

プレンドヴウーン はい、お留守です。
ジュルジョーン うん、丁度いい。メヌエツトが踊りたい。
皆を呼んでくれ。

プレンドヴウーン 音楽家達はどこかへ行ってしまってい
まして……。
ジュルジョーン ふん、なるほど。……。神は我を見捨て

たまつたか……。プレンドヴウーン、お前、メヌエツトを歌
え。

プレンドヴウーン 私はその、歌は酷く下手で……。
ジュルジョーン 構わん。二人でやるつ。

（二人でメヌエツトを歌う。ジュルジョーン、それに合わせ
て踊る。）

ジュルジョーン アー、ラーラー、ラーラー……。
駄目だ。ちつとも面白くない。もういい、プレンドヴウーン、
お前がいると余計つまらん。

プレンドヴウーン 畏まりました、旦那様。（退場。暫く
してまた登場。）旦那様、旦那様に、何かトルコの方がお会
いになりたいと……

ジュルジョーン ラーラー……。トルコの方？ お前、
酔っているんじゃないだろうな、プレンドヴウーン。この私²
にトルコの方が何の用があるっていうのだ。

プレンドヴウーン 私にも分りません。何故トルコの方な
んでしよう。

ジュルジョーン まあいい、入ってもらえ。
（プレンドヴウーン退場。すぐに戻つて来る。カヴィエーリ、
トルコ人の服装をして、その後から登場。）

カヴィエーリ 旦那様、ひよつとして……。私のことを御
存じでいらつしやいますしょうか？

ジュルジョーン いいえ……。
カヴィエーリ 私の方は旦那様、旦那様のことをすこし
存じ上げておるのですが……

ジュルジョーン ほほう、それはどういふことでしょうか

な。

カヴィエーリ 旦那様は御幼少の頃、まことに、まことに面白いお子様でいらつしやいました。御婦人方は、先を争って旦那様のお手を取ろうとしたものでございます。その小さいお手に口づけをしようとして、先を争って……

ジュルジョーン これは嬉しいお話を……ただ……「口づけ」ですと？ 古風な仰り方ですな。あなたはまだ、とてもとてもお若い方という印象ですが……

カヴィエーリ 無理ありません、若く見えるのは。私は、このところずっとトルコで暮しておりましたから。

ジュルジョーン ははあ……

カヴィエーリ そうです。実は旦那様、私は旦那様のお父上に、非常に親しくして戴いておりました。ああ、あの、亡くなられたお父上は、実に、実に、本物の貴族と言えるお方でしたなあ……

ジュルジョーン 何ですと？ あなたは、私の父とお知り合いだったと仰るのですか？

カヴィエーリ そうですとも。

ジュルジョーン そしてあなたは、父のことを貴族だったと仰るのですな？ 間違いはありませんな？

カヴィエーリ 間違いなど……正真正銘の貴族でいらつしやった……

ジュルジョーン（カヴィエーリの手を握る。）いや、こんな嬉しいお話を聞かせ下さるとは……さあどうぞ、どうぞ、お坐り下さい。全く、このパリでは、しようもない連中が沢山いるもので。私の父が商人だったなどと、とんでもな

い噂を広めているんですからなあ……

カヴィエーリ 何ていう馬鹿な話を……お父上は、それはちゃんとした方でいらつしやいました。ラシャ、その他、色々な製品に目がお利（き）きになって……いろんな製品をお買いになっていらしては、お知り合いにお配りになったのです。配るといっても勿論、お金を取りました。ただで物を貰うと、人は自尊心が傷つけられることをよく御存じだったからです。

ジュルジョーン おお、何という素敵な話！

カヴィエーリ ちよつとその……私が旦那様のお宅にお邪魔しましたのは、実は素晴らしいお話があるからなのです。このパリに、トルコのスルタンの王子殿下がいらしているのです！

ジュルジョーン そんな話は聞いたこともありませんが……

カヴィエーリ で、実は旦那様、私がお殿下の通訳なのでして……

（ジュルジョーン、立上がる。）

カヴィエーリ どうぞ、お坐り下さい。私になど、敬意は不要です……ここで、実に重要な事柄があるのですが……盗み聞きしている者はいないでしょうか？

ジュルジョーン プレンダヴワーン、下がってよい。

プレンドヴワーン 畏まりました、旦那様。（退場）

ジュルジョーン どうぞ、御遠慮なくお話し下さい。

カヴィエーリ 殿下がお宅のお嬢様に恋をされたのです。

ジュルジョーン えっ？……ああ……いつ……何故……

・エー、どこで私の娘に会われたのでしょうか。

カヴィエーリ 偶然です。道で。しかし、どこで会ったか、そんなことはどうでもよろしい。大切なことは、殿下があなたの婿殿になりたいという、この一点でして。

ジュルジョーン おお、通訳殿 これはあまりの衝撃で……カヴィエーリ 今朝私は殿下とお話をしておりました。すると突然殿下が「アクチーム・クローリ・サリエール・スンシャアツラー・ムスタファ・ギデーツル！ アマナーヘム・ヴアラハーニ・ウツセルカルブラート」と仰せになったのです。

ジュルジョーン ほう、そのようなことを……カヴィエーリ そつ、殿下の口つつしのお言葉がこれで……で、如何です？

ジュルジョーン（独り言で。）糞っ！ 父親の奴、トルコ語を私にちゃんと教えておいてくれれば良かったのに！

カヴィエーリ 如何です？ これを聞いてどんなお気持ちです？ 相手はトルコのスルタンですぞ。

ジュルジョーン 通訳殿、申し訳ない。白状致しますと、私は勿論少しはトルコのお言葉が話せます……しかし、何せ、お分りでしょうか？ 例の女家庭教師というのは、その……ですから、半分くらいは分ります。……しかし、その……カヴィエーリ いえいえ、どうぞ御心配なく。今訳して差し上げます。さっきの殿下のお言葉は「お前、あの素晴らしいお嬢さんを見たか？ ほら、パリの貴族のジュルジョーン、あの人のお嬢さんを。」私は恭しく答えました。「はい、勿論」いや、勿論これをトルコ語ですよ。殿下は仰せになりました。「アーハ・マラバーバ・サーヘム！」訳しますとつ

まり、「ああ、何て私はあの娘に恋していることだろう」と……そして私に命じました。「行ってジュルジョーン殿のお手を求めて来い。そして説明するのだ。さすれば汝ジュルジョーンをママムーシの位につけてやるぞ」と。

ジュルジョーン ママムーシ？……それは勿論……いやいや、その「ママムーシ」とはどんな地位で？

カヴィエーリ 侍従です。

ジュルジョーン アーイ、アーイ、アーイ、アーイ！

カヴィエーリ いや、これだけではない。実は殿下直々にこちらにおいになると仰せになっておられる。

ジュルジョーン まさか……私は……

カヴィエーリ 何ですか？ それともひょっとして、この結婚に反対だとも？

ジュルジョーン 通訳殿、何故私がそんな大それたことを。

ああ、それにしても何て不幸なこと！ 実はその、私の娘リュスィーリというのは、それは無鉄砲な女でして、クレオントとかいう男に今、夢中なのです。白状しますが、その惚れ方が尋常でなく、梃（てこ）でも動かんというやつで……

カヴィエーリ ジュルジョーン殿、それは心配ありません。お嬢様がこのスルタンの王子を一目御覧になれば、一遍に片がつきます。これは内緒ですが……いいですか、国家的秘密なんですからね、このことは……このトルコの王子は、そのクレオントという若者に瓜二つなんです。私も道で逢ったことがあります、それはそれはよく似ていて……しかし、ジュルジョーン殿、こんなことを喋ってぐずぐずしている時ではありません。すぐお着替えを……トルコ風の衣装

にして戴かなければ……

ジュールジョーン それは無理です。トルコの衣装など、私には全く……

カヴィエーリ いえいえ、準備は万端整えてあります。今、トルコ宮廷お抱(かか)えの仕立屋がやって来ます。その者がすぐさま着付けを……おい!

(仕立屋登場。)

ジュールジョーン 何だこれは。うちの仕立屋じゃないか。おい、トルコ宮廷お抱えの仕立屋というのはお前か。

仕立屋 はい、私で。トルコの王子様に認められまして。では、お着替えを……寢室の方へどうぞ……

(ジュールジョーンと仕立屋、退場。)

カヴィエーリ(扉の方へ。)おい! みんな!

(音楽の教師とダンスの教師、登場。)

カヴィエーリ 二人とも準備は万全だな? それに秘密は守ってくれるんだな?(二人に金を渡す。)

ダンスの教師 どうぞ御心配なく。私どもは、藝につかえる真正正銘の人間です。ですから勿論、藝のためにお金を下さる方には、つべこべ言わず、直ちに御仕えする者です。

カヴィエーリ うん、そうこなくちな。では頼むぞ。王子はまもなくやって来る。

(二人の教師退場。ドララント登場。カヴィエーリ、顔を隠す。)

カヴィエーリ こいつはえらい時に……まづいな、これは……

ドララント 今日。(カヴィエーリの顔を覗きこむ。)

カヴィエーリ カリガール・コムバート。

ドララント えつ? 今何と?

カヴィエーリ アムパスウ?

ドララント あなた、フランス語が駄目なんですか?(独り言。どこかで見た顔だぞ、これは。)

カヴィエーリ フランス語……私……駄目……

ドララント トルコ人なのかね? 君は。

カヴィエーリ トルコ人……私。おお……ミコースイ……

ドララント 何がミコースイだ。君はカヴィエーリじゃないか。

カヴィエーリ シーツ……お願いです、どうか……

ドララント 何です、一体、その仮装は。

カヴィエーリ どうか正体を明かさなさい。お願いです。

今私の主人のクレオントが、トルコの王子として、ここに現れます。

ドララント 勿論、君の悪智恵だな?

カヴィエーリ ええ、隠しだては致しません。私が考えて……

ドララント 何故そんなことを。

カヴィエーリ あの旦那は、貴族ではないからと言って、娘を私の主人に許そうとしないのです。

ドララント ああ、そうか。

カヴィエーリ ですから、お願いです……

ドララント おお、こいつは失敗、私は家に財布を忘れて来たぞ!

カヴィエーリ　いくら入っていたんです？　財布には。

ドララント　二十ピストル。

カヴィエーリ　どうぞ、旦那様。この二十ピストルをお使い下さい。

ドララント　すまない。なあ、カヴィエーリ、ここに侯爵令嬢のドリメーヌを連れて来てもいいかな？　このお笑い劇を見せたいんだ。勿論仮面をつけて来させるが……

カヴィエーリ　それはもう……どうぞ、どうぞ……

ドララント　よし、分った。(退場)

(ジュルジョーン登場。トルコ風の衣装を着ている。その後ろから仕立屋も登場。)

ジュルジョーン　やあ、通訳殿……私の衣装はこれでいいかな？

カヴィエーリ　ほほう……ちょっと後ろを見せて……よろしいです。

(通りから音楽が聞こえて来る。それから、灯りがチラチラ見えて来る。)

カヴィエーリ　さあ、王子様ですよ！

(クレオント、お付きの者達に導かれ登場。トルコの衣装)

(音楽の教師とダンスの教師、登場。その後ろに役者達。全員トルコの衣装。)

クレオント　アンブザーヒム・アキバラフ・サラマレーキ！

ジュルジョーン　通訳殿、頼む！

カヴィエーリ　「ジュルジョーン殿、あなた様のお心は、年を経るに連れて、柔らかい薔薇の花びらのように、花開い

ていらっしやいます」と。

ジュルジョーン　王子様の従順な僕(しもべ)、ジュルジョーンでございます。

クレオント　ウスチーン・イオーク・パーゼ・モラーン。

カヴィエーリ　あなた様に神が、ライオンの勇氣、蛇の智慧、が授けられますように。

ジュルジョーン　どうぞ、王子様にもその同じものが授けられますように！

カヴィエーリ(クレオントに)　オーサ・ピナメン・サドーク？

クレオント　ベリー・メン。

ジュルジョーン　何という意味でしょう……「ベリー・メン」……

カヴィエーリ　「ベリー・メン」とは、「できるだけ早く結婚の式を上げねばならぬ。何故なら、今にも私は汝の娘御にお会いしたいから。そして速(すみや)かに結婚の式を終えたいから。ことほどさように、私の彼女に対する愛は深く、またその愛は私の心に深く食い込んでいるからである」、

終り。

ジュルジョーン　ほほう、これだけ沢山のことが、たった二言、「ベリー・メン」で……素晴らしい言葉だ。フランス語よりずっと優秀だ。

カヴィエーリ　そんなもの、比べものになりませんよ。ああ、お客様がいらっしやいました。

(ドララント、ドリメーヌを導き、登場)

ドララント　ジュルジョーン殿、お許し戴けますでしょう

な？ 我々の参列を。

ジュルジョーン おお、これは侯爵殿。大歓迎です。(ドリメーナに。) よくいらっしやいました、侯爵令嬢殿。先日の家内のあのようなおぞましい登場で、すっかり愛想をつかされてしまったことと、観念しておりましたのに、またこのように御来駕下され、洵(まこと)に恐縮の到りでございます。

ドリメーナ ああ、あの事・・・つまらない事ですね。私、すっかり忘れてしまいました。それに私、今日はマスクをつけますの。そうすれば、奥様にも、私だとはお分りにならないでしょうし。そうそう、ジュルジョーン様、今度は立派な地位におつきとの事、おめでとつございます。

ジュルジョーン そうです。侍従の地位を与えられましたな。(ドリメーナに片手を差し出す。相手にキスをさせるため。)

(ドリメーナ、嫌々ながら、その手にキスをする。)

ジュルジョーン いや、このような虚礼、私とても厭でたまらないのだが、貴族の義務・・・致し方のないもので・・・(クレオントに。) 殿下、サラマーンキー、御紹介申し上げます。こちら、侯爵令嬢、ドリメーナ・・・おっと、これではお分り下さいませぬね・・・ペーリ・メーン・・・おい、通訳殿！

カヴィエーリ(ドララントを指し示して。)

コーズリー・マーナ。これは、「御紹介致します。こちらはドララント侯爵です」という意味で・・・

ジュルジョーン(ドララントに小声で。)

ほらほら、手を

接吻して・・・

ドララント(カヴィエーリに。)

何だ、こんなことまでやるのか！

カヴィエーリ お願いです、キスをどうか。目論(もくろみ)をぶち壊さないで・・・

カヴィエーリ さあ、花嫁の御登場！

ジュルジョーン(心配そうに。)

そうだ、花嫁に御登場願おう。

(音楽。それから舞台裏から、リュスイーリの金切り声が聞こえる。)

ジュルジョーン ブレンドヴヴァーン、リュスイーリはどこだ。

ブレンドヴヴァーン 今お連れするところで・・・しかし、ひどくおむづかりで・・・

ジュルジョーン そうだと思った・・・ままならぬものだ。(トルコ人達、嫌がるリュスイーリを連れて来る。)

ブレンドヴヴァーン さあ、いらっしやいました、旦那様

ジュルジョーン(リュスイーリに。)

カリガール・コンバート。これはトルコ語で、「お前は今からこのトルコの王子と結婚するんだ」という意味だ。

リュスイーリ 助けて！

ジュルジョーン ブレンドヴヴァーン、ブレンドヴヴァーン、娘を抑えるんだ！

ブレンドヴヴァーン 旦那様、抑えているのがやっとです！

ジュルジョーン 何をやっている、リュスイーリ。ウスチー

ン・マラーフ・・・お前もトルコ語を勉強しなければ・・・

ブレンダヴワーン、頼む、その手を、その手を抑えるんだ。．．
王子様、どうか、娘の狂態にお気をおとめになりませぬよ
う．．．馬鹿な娘で．．．ベリー・メーン

リュスイーリ 誰か．．．誰か来て．．．助けて！

ジュルジョーン ベリー・メーン．．．ベリー・メーン．．．
(突然、公証人登場。二、三冊の本と、カンテラを持ってい
る。)

公証人 失礼ですが、ここで結婚式があるとか．．．で、
ここに来るように言われたものです．．．私は公証人で．．．
カヴィエーリ ここです、そう、ここです。どうぞ、どう
ぞ．．．

ジュルジョーン 公証人だと？．．．呼んだ覚えはないが．．．
サラマレーキー・バズーリ．．．全く、何て有様だ、これ
は．．．ブレンダヴワーン！

ブレンダヴワーン 旦那様、私はもう駄目です．．．お強
いお嬢様で．．．もうへとへと．．．
リュスイーリ アーアー．．．

公証人 何ですか一体これは。実際驚きましたね。何が結
婚式ですか。準備も何もありません！

カヴィエーリ いえいえ、準備は万端．．．ええ、万端．．．
どうか行かないで。お願いです、公証人様。今はこんな状態
ですが、すぐ結婚式になるのです。どうか．．．(公証人に
目配せをする。)

公証人(困って。) 分りませんな。それに、その目配せ．．．
一体何です？

カヴィエーリ シッ、黙って。目配せなど何も．．．どう

ぞ、さあ、お坐りになって。(リュスイーリに。) お嬢様、
お願いです。どうか、どうか、王子様を御覧になって．．．
一目．．．一目．．．

リュスイーリ いや！ いや！ お前なんかあつちへ行け！
いや！

公証人 生涯でこんな結婚式は見たことがありませんな。
花嫁がいやだと言っている。無理強いはいけませんな。

カヴィエーリ 今すぐ．．．今すぐ承諾します。必ず．．．
すぐ！(リュスイーリに。) さあ、こつちを。私を見て。ほ
ら、カヴィエーリですよ．．．ほら．．．ほら、ほら．．．
リュスイーリ 何ですって？ カヴィエーリ？

カヴィエーリ シッ！
ブレンダヴワーン よーし、やっと静かにさせたぞ、この
私が。

カヴィエーリ さあ、王子様の顔を見らんです。
リュスイーリ(クレオントの顔を見て。) あっ！
クレオント リュスイーリ！

ニコーリ(突然走って登場。) 私のお嬢さんに何をしてい
るんです！ トルコの人と結婚させるなんて、私が許しませ
ん！

ジュルジョーン こいつを縛りあげろ、ブレンダヴワーン！
ブレンダヴワーン いえいえ、旦那様、それは御勘弁を！
公証人 とんでもない結婚式があつたもんだ。

カヴィエーリ(ニコーリに。) 大人しくするんだ、この気
違い！(こつそりと。) 私はカヴィエーリ、王子はクレオ
ント！

ニコリー あっ！ お嬢様、どうぞ……どうぞ、結婚に同意なさって……

リュスイーリ お父様、私、結婚に同意しますわ。

ジュルジョーン あーあ、やっと……どうぞ殿下、娘は同意しました！ ベーリ・メーン……これで一件落着だ。

(突然床が大きく開き、ジュルジョーン夫人登場。)

ジュルジョーン と思ったら、一難去ってまた一難。これはこれはエライところへお出ましだな、奥方殿。天が獅子の智恵をお前に与えたところか。この老いぼれの蛇め！……そうか、こんな話はどうせ通じないな……とにかくトルコの方々に無礼な真似だけは止めてくれ……さあ、あつちに行くんだ……ウスチーン・イオーク……殿下、実は、これが私の妻で……似ても焼いても食えない女……

ジュルジョーン夫人 老いぼれのイカサマ師、今度は一体何を企んだ！ 自分の娘を殺そうというの！ プレンドヴワーン！ すぐ警察を呼びなさい！

公証人 何ですと？ 結婚式に警察？ 分りました。私はもう出て行きます。

カヴィエーリ 待って、お待ち下さい。もう少しだけ。(ジュルジョーン夫人に。) 奥様、どうか、王子の顔を見て。お願いです。

(ジュルジョーン夫人、カヴィエーリに平手打ちを食わせる。) 公証人 これは勇ましい。よしよし、面白そうだ。もう少ししてみよう。(坐る。)

カヴィエーリ 奥様、顔を殴る前に、どうかこの顔を見て下さい。

(床からパンクラーズ登場。)

パンクラーズ ジュルジョーン殿、パリの哲学者仲間、それに、一般庶民の間に流れる噂により、お宅でお祝い事があつたことを知りました。どうか、祝福の言葉を一つお許し下さいますよう……

ジュルジョーン 何ですと？ お祝い事？ まあ、このこの有様を御覧下さい。この猛り狂った復讐の女神が、トルコの通訳殿を平手打ちして、これでは祝言の後、トルコと戦争が始まってしまいます……

プレンドヴワーン 戦争？……それは起りますよ、きっと。

カヴィエーリ いえいえ、戦争など起りません。平手打ちなどサヨナラです。(ジュルジョーン夫人に小声で。) 奥様、私はカヴィエーリ、そしてこちらはクレオント。

ジュルジョーン夫人 あっ！(ジュルジョーンに。) 賛成ですわ、私。さあ、娘をトルコの王子様に。どうぞ！

ジュルジョーン おお！……殿下、神様が殿下の懇願をお聞き届けになりました。女房に天から智恵が降って来ましたぞ！

カヴィエーリ 公証人殿、さあ、あなたの出番です！

公証人 そのようですな。思いもかけぬ進展で、あれよあれよという間に、納まるどころへ納まりましたな……では、新郎新婦の名前を……

ジュルジョーン では、こちら側に、トルコのスルタンの息子……

公証人 スルタンでは分りませんな。名前をどうぞ……

カヴィエーリ（小声で。）あれは冗談で。書いて下さい。こちら側にクレオント、その横にリュスイーリ・ジュールジョーン。

公証人 フム、それなら話は別だ。（書く。）

カヴィエーリ（公証人に。）第二の組、こちら側に召使いカヴィエーリ、その横に小間使い、ニコーリ。（ジュールジョーンに。）旦那様、白状しますが、実は私は、旦那様の小間使いに惚れていまして……

ジュールジョーン 小間使いに惚れるなどと、通訳殿、それは馬鹿なことですよ。それほど結婚の必要があるのなら、私の女房となさつたらよろしい。それならトルコでも幅がきく。

カヴィエーリ いえいえ、旦那様。そのような旦那様の幸せをぶち壊すようなことは、とても、とても……

ジュールジョーン それはまあ、お好きなように……そう、御列席の方々、誰が私の女房と結婚したい方はおられますか？ 私はこれと離婚するつもりでして……丁度運良く公証人もおられることで……そうそう、哲学者先生、先生は如何です？ どうせ先生なら、「結婚したように見える」だけですむ筈ですから……

パンクラス いやいや、そんな手間を取ることはありません、現在ジュールジョーン殿に見えている通りのこと」をお続けになればよろしい。

ドラント そうだ、これはよい機会だ。ドリメーナ、結婚……いいんだね？

ドリメーナ 勿論ですよ、ドラント様！

カヴィエーリ（公証人に。）では、書いて……こちら側

に……その横に……

（公証人、書く。）

ジュールジョーン どういうことだ、これは、侯爵。（ドリメーナに。）あなたはその……私の指輪を……

ドラント 指輪！……ジュールジョーン殿、大金持のあなたらしくありませんぞ。端金（はしたがね）ではありませんか。私とこの素晴らしい婦人の結婚の祝いに、贈物として下さつてもよいではありませんか。

ジュールジョーン ベーリ・メン……

カヴィエーリ さあ、これで全てはうまく纏（まと）まつてと……ハッピー・エンド！（ターバンを取つて。）ジュールジョーンの旦那様！

クレオント（ターバンを取つて。）ジュールジョーンの旦那様！ お許し下さい。愛しあっている、幸せな二つの心を結びあわせるために、どうしてもこの変装が必要だったので。そう、私はクレオントです。ほら、お嬢さんの、この幸せそうな顔！ どうが私達のことを怒らないで。仲直りしましょう！

ジュールジョーン 何だ、これは。カンテラを持って来い。

（よく相手を見て。）カヴィエーリ！ クレオント！ 何だ、何だ何だ、これは！ 幻（まぼろし）に取り囲まれているのか、この私は！ マラバーバ・サーベム！ アクチャーム・クローク・サレル！……トルコ人じゃないのか、お前達は！（音楽の教師からターバンを取る。）音楽の教師！（ダンスの教師からターバンを取る。）ダンスの教師！ 何だ、何が起つたんだ！ もう私は何も信じないぞ！ もう私

は誰も信じないぞ！

教師達と役者達（声を揃えて。）おめでとつございます、
ジュルジョーン様！ 若い者達に幸せがやって来ますように！

（音楽 轟く。）

ジュルジョーン夫人 愛（いと）しいあなた、どうかもう
正気に返つて。病気になる前の、あの優しい、楽しい生活に
戻りましょう。

リュスイーリ（ジュルジョーンに飛びつき、抱擁して。）

お父様！ 私、幸せ！

ジュルジョーン 違つ！ 違つ！ これはみんな幻だ！

（ジュルジョーン夫人に。）お前が私の妻だなどと、私は信
じるものか！（ジュルジョーン夫人の、女の衣装を剥ぎ取る。）
そら見る！ こいつはユベールじゃないか！ おお、私は本
当に氣違いになつたぞ！ 私を支えてくれ！

全員 落着いて、ジュルジョーン様！

ジュルジョーン 哲学者先生を！ こちらへ・・・頼む。

私を落着かせてくれ！

（パンクラース、ジュルジョーンの傍に現れる。）

ジュルジョーン パンクラース先生、頼みます。何か楽し
い話を！

パンクラース お安い御用で・・・これで芝居は終！

ベジャール（ジュルジョーンの衣装を脱ぎ、黒いレインコー
トを着て、カンテラを持つ。）全員、解散！（オーケストラ
に。）指揮者！ 退場の行進曲だ！

（音楽。）

（登場人物全員、床から下へ降りる。）

（幕、下りる。）

ベジャール（レインコートにしつかり身を包んで、幕の隙
間から。）さてと、これで私を呼びとめる者は誰もいないぞ。
お天道（てんとつ）様のお陰だ。今日も一日終る。ともしび
も消えて行く。スターラヤ・ガルビヤートナに行くでしょう。
好物のあの酒、マスカット酒が私を待っている。アーラーラ
ラ・・・

（音楽に合わせ、退場。）

（終）

平成一七年（二〇〇五年）七月十五日 訳了

原題は Polounnyi Zhurden

<http://www.aozora.gr.jp> 「能美」の項 又は
<http://www.01.246.ne.jp/~tnouni/nouni1/default.html>